

グラン＝ギニョル劇と細菌学 —フランシュヴィル『美しき連隊』を中心に—

外国語学部 真 野 倫 平

はじめに

19世紀後半はヨーロッパにおいて近代細菌学が誕生した時代である。フランスではルイ・パストゥール（1822－95）が自然発生説を否定し、微生物がさまざまな病気の原因であることを解明した。彼はワクチンの予防接種を開発するとともに、低温殺菌法の発明などを行った。同じ頃ドイツではロベルト・コッホ（1843－1910）が炭疽菌・結核菌・コレラ菌などを発見し、細菌培養の技術を確立した。このようにドイツとフランスを中心にして細菌学は急速な進歩を遂げた。

これらの医学的発見は衛生に関する観念を大きく変えた。イグナーツ・ゼンメルヴァイス（1818－65）はすでに1840年代に消毒法による院内感染の予防を訴えていたが、彼の主張は医学界によって黙殺された。しかし1870年代になると医師たちはこぞって伝染病をもたらす細菌の研究に乗り出し、さらに行政も各種の衛生対策に取り組むことになる。

20世紀初頭に成立したグラン＝ギニョル劇は、同時代のブルジョワ階級が現実を抱える不安を想像力の源泉としていた¹。すなわちそこでの恐怖の対象は、犯罪者・プロレタリア・流れ者・異民族・精神病者といったブルジョワ社会にとっての「他者」とでも言うべき存在であった。細菌もこれらの脅威とならんでこのジャンルの重要な素材となった。それではグラン＝ギニョル劇は同時代の細菌学的知識をどのように作品に取り入れたのか。本論ではロベール・フランシュヴィル『美しき連隊』（1912）を取り上げて、その導入の方法を明らかにしたい。

1 グラン＝ギニョル劇の特徴については真野倫平編・訳『グラン＝ギニョル傑作選』水声社、2010年の解説を参照。

1 フランシュヴィル『美しき連隊』

フランシュヴィル『美しき連隊』は1912年3月22日にグラン＝ギニョル座で初演された。梗概を以下に記す（全二幕）。(1) ドイツ帝国軍の兵営で天然痘が流行し、軍医のマウザーはワクチンの到着を待っている。ポーランド人の兵士ミロシュは普段から反抗的態度を示し、仲間たちのいじめの的になっている。マウザーは強力な毒性の狂犬病ウィルスを発見し、パリのパストゥール研究所にサンプルを送ることにする。自暴自棄になったミロシュは、たまたま手元にあったウィルスとワクチンの容器を取り替える。(2) 連隊の兵士たちが突然暴動を起こし、町には戒厳令が敷かれている。表向きは反乱とされているが、実は兵士たちが謎の病気で発狂したのである。マウザーは自分が発見した狂犬病ウィルスが原因であることを突き止める。軍の上層部は銃撃による鎮圧を決定し、連隊長は苦渋のすえそれを受け入れる。ミロシュが捕らえられ罪を告白すると、連隊長は彼を死刑に処す。連隊長は攻撃命令を出し、自らも一斉射撃を浴びて倒れる。

本作はワクチン接種の事故によるバイオハザードにより千五百人の兵士が犠牲になるという大惨事を描いている。グラン＝ギニョル劇では一般に俳優の身体性が重視され、登場人物の身体をめぐるドラマツルギーが構築される²。本作でも狂犬病の発作が目撃者の証言によって描写されるとともに、俳優の身体によって実際に舞台上で示される。

ヴォルフ（窓を指す）ごらんなさい。彼らは爪を震わせ、出口を探し、壁をかきむしっている。うなり声を上げて閉まった鉄柵を揺らし、そこにしがみつき、鉄格子に噛みついていて。いいですか、あれらの狂人たちが今にも抑えがたい波となって町に溢れだそうとしているのです。そうなったら何が起こるか考えてみてください³。

2 歴史的背景

この作品を理解するために、いくつかの歴史的背景を明らかにせねばならない。本作の舞台オボルニキはドイツ帝国のポーゼン州、現在のポーランド西部にある。歴史を振り返ると、ポーランド国家は18世紀後半にロシア・プロイセン・オーストリアに

2 前注を参照。

3 Robert Francheville, *Le Beau Régiment in Le Grand Guignol. Le théâtre des peurs de la Belle Epoque*, édition établie par Agnès Pierron, Robert Laffont, 《Bouquins》, 1995, p. 542. 以下本作については引用に続けてページ数を記す。

よるポーランド分割のために消滅した。1807年にナポレオンによりワルシャワ大公国として再び独立したが、1815年のウィーン会議で東部の四分の三はロシア皇帝を元首とするポーランド立憲王国となり、西部はポズナン大公国としてプロイセンの支配下に置かれた。ポズナン大公国は1848年に独立を失いポーゼン州となり、1871年からのビスマルクの文化闘争においてはカトリック系住民に対する激しい弾圧が行われた。ポーランド人に対する抑圧政策はビスマルクの失脚後も行われ、ドイツ帝国崩壊まで続けられた。

兵士ミロシュはポズナン人であり、ドイツ軍に迫害された過去を持つ。軍隊に強制的に徴用されたものの、ドイツを祖国とは認めていないし、軍隊への忠誠心もない。「ああ、これも軍隊の素敵な思い出だ。11月のある朝、憲兵がおれを家まで探しにきた。そいつらはおれに手錠をかけた、まるで殺害犯か窃盗犯みたいに。それから、おふくろを抱くことも許さず、皇帝の名においておれを連れ去った。祖国ドイツに奉仕するようと。おれの祖国でもないのに」(522)。彼の反抗的態度は周りの兵士の反感を買うばかりである。「おまえは革命派だ、アナーキストだ」(522)「こいつはポーランド人で……社会主義者なんです」(527)。

もうひとつの歴史的背景は本作が書かれた時代に関わるものである。普仏戦争に敗北したフランスは1871年のヴェルサイユ仮条約ならびにフランクフルト講和条約によって50億フランの賠償金を課され、アルザス・ロレーヌをドイツ帝国に割譲した。この敗戦はフランス国民に根深い反独感情を植えつけ、そのルサンチマンは後のブーランジェ事件（1889）やドレフュス事件（1894）の心理的背景となった。その後、フランスとドイツは植民地をめぐり激しく対立する。1905年3月にドイツ皇帝ヴィルヘルム2世が突然モロッコ北端のタンジールを訪問し、フランスのモロッコ進出を牽制した（第一次モロッコ事件）。翌年1月のアルヘシラス会議ではモロッコにおけるフランスの優位が追認された。1911年4月にフランスがモロッコの内乱の際に出兵すると、ドイツは7月に軍艦をモロッコ南西のアガディールに派遣した（第二次モロッコ事件）。11月に協定が成立し、翌年3月にモロッコは正式にフランスの保護国となった。

『美しき連隊』が初演された1912年3月は、まさにフランスで反独感情が高揚しナショナリズムの波が押し寄せていた時期に当たる。ドイツ帝国がポズナンに対して行った暴虐をミロシュが糾弾する場面は、ポズナンをアルザス・ロレーヌに置き換えてみれば、ドイツによる併合の不当さを批判するものとして読むことができる。その意味で本作はドイツの誇る「美しき連隊」のもろさを描くことで、ドイツ帝国の威信そのものを批判している。

大佐 さあ、見てみろ、ミロシュ・ペトロヴィッチ。あの千五百人の男たちを。

静かで、誇り高く、身じろぎもせず、まるで輝かしい彫像のようだ。あれがお

まえの馬鹿にする、愛国的義務の生きたシンボルだ。列の中で何ひとつ動くものはない。この力の塊にはわずかな震えさえ見られない。それが命令一つでまとまり、合図一つで解き放たれるんだ。美しいと思わないか？

ミロシュ 遠くから見るぶんには美しいです。(527)

3 細菌学の発達

次に、19世紀後半以降のフランスとドイツにおける細菌学の歴史をたどってみよう。フランスではルイ・パストゥールが1861年に『自然発生説の検討』を著し、従来の「生命の自然発生説」を否定した。彼は1865年に低温殺菌法を開発、1867年にカイコ病根絶に成功し、さらにワクチンによる予防接種の開発を行った（1879年の鶏コレラワクチン、1881年の抗炭疽ワクチン、1885年の狂犬病ワクチン）。また、1887年にはパリ15区にパストゥール研究所が創立され、その後の細菌学研究の世界的な拠点となった。同じ頃ドイツではロベルト・コッホが炭疽菌（1876）、結核菌（1882）、コレラ菌（1883）を発見した。

当時、フランスとドイツは細菌学の二大先進国であり、この分野でも国家の威信を賭けた激しい競争を繰り広げていた。「ドイツとフランスという微生物学の超大国の二つが渡り合う。それぞれが個々にその天才を抱えている。顕微鏡技術の名手であるドイツ人は病原菌の同定技術にかけては名人であるとの評判で、片やフランス人は弱毒化の技術にかけては名人芸を修得していた⁴」。『美しき連隊』ではドイツ人医師が絶えずフランスのパストゥール研究所をライヴァル視し、功を焦るあまり破局を招いてしまう。

マウザー （彼に手紙を差し出し）ほら、ちょうどパリのパストゥール研究所が、われわれの10月9日の報告に対して、いかにも理路整然とこう証明している。どんなに強力なウィルスもウサギを6日以内に殺すことはできない。たとえ穿孔によって直接硬膜に接種した場合においても。

グラーフ それじゃ、われわれはパストゥール研究所に堂々と反論してやることができますね。(524-525)

細菌学の創成期においてワクチン接種による事故は決して珍しいものではなかった。1890年にコッホは結核のワクチンとして「リンパ液」（すなわち「ツベルクリン」）を

4 ピエール・ダルモン『人と細菌 17-20世紀』寺田光徳・田川光照訳、藤原書店、2005年、262頁。

開発したと発表した。しかしこのワクチンに治療効果はなく、各国で接種による甚大な被害をもたらしてしまう。当時、結核はヨーロッパ人にとっての第一の死因であり、ワクチン開発でフランスに後れを取っていたドイツにとって治療薬の開発は大逆転をもたらすはずであった。コッホが功を焦った背景には、国家の威信を賭けた研究という無言の重圧があった⁵。

また、1930年には悪質なワクチン接種による大事故という『美しき連隊』に酷似した事件が実際にドイツで起きている。パストゥール研究所で開発されたばかりのBCG ワクチンの接種によって多くの死者が出た。調査の結果、ドイツの医師がワクチン进行处理した際の培養液の取り違いが原因であることが判明した。

1930年5月、恐ろしいニュースが導火線火薬のように世界中に広がる。リュベックでワクチン接種を受けた何人かの子供が重篤の腸結核に感染したのである。4月26日に最初の子供が死去すると、死者が続々と出る。ワクチンはパストゥール研究所から提供された培養液からその場で用意されたものであった。

被害の拡大が公になり、不安は頂点に達する。250人の子供がワクチンを接種され、そのうち71人が死亡、5人が重体で、27人が軽度の感染を示した⁶。

こうした試行錯誤を重ねつつ細菌学は長足の進歩を遂げた。それは医学を根本的に変革しただけでなく、一般市民の衛生観念の変化をもたらした。衛生学者たちは清浄な水と空気的重要性を訴え、行政は細菌の媒介物であるごみや動物、さらには人間に対する予防措置に取り組んだ。しかしそれは同時に、細菌という目に見えない敵に対する漠然とした不安や根拠のない恐怖を社会全体に広げることになった。「ここで、パストゥール革命が社会的表象や社会的戦略にどのような影響をあたえたか、みておいたほうがいいだろう。細菌の存在の発見によって、ヴィレルメの創始した疫病学は再検討をせまられた。病気をひきおこすおそれのあるものは、さらに広範囲におよび、しかも容易に知覚しにくくなったのであるから、不安はいっそう大きくなっただけだった⁷」。

時には過剰な警戒心から行きすぎた措置が取られることもあった。病人に対して、

5 「ドイツ細菌学の威光については当時誰にも異論の余地がなかった。だがドイツの学者たちは細菌を発見する技術では名手として通っていても、ワクチンをいこうに開発できないことに苦しんだ。ところが1890年にコッホはある治療法を開発したと告げて世界を驚かせた。当時の最大の災厄である結核に対しては治療が大問題とされていたので、治療法だったら何でもよかったのだ！」（同、373頁）

6 同、430頁。

7 アラン・コルバン『においの歴史』藤原書店、1990年、309頁。

さらには発病していない健康な保菌者に対して隔離措置が取られ、あるいは感染源とされる部位の摘出手術が行われた。「健康な保菌者たちは何の症状も示さずに自分の周りに病気の種を蒔く。ひとたび見つけ出されるや、彼らはのけ者になり、時には職を失い、医者や監視下に置かれ、治療を課せられ、さらには感染源と推定された部位を取り除くために外科的手術さえ強制されるのである⁸」。とりわけ有名なのが「チフスのメアリー」として知られるアメリカの家政婦の例である。20世紀初頭、彼女は勤め先の家族にチフスを感染させたせいで拘束され、残りの人生の大部分を隔離されて過ごした⁹。

4 グラン＝ギニョル劇と伝染病

このような衛生観念の発達を背景にして、伝染病はグラン＝ギニョル劇の重要な主題となった。具体的な作品名を挙げると、ポール・オティエ、ポール・クロクマン『灯台守』(1905)では、隔絶した孤島の灯台で働く灯台守の父子のうち息子に狂犬病の症状が現れる。ポーの『赤死病の仮面』の翻案であるエレヌ・ド・ズイラン・ド・ニーヴェルト男爵夫人『仮面舞踏会は中断される』(1905)では、閉ざされた城館で饗宴を楽しむ人々が伝染病の侵入にみまわれる。アンリ＝ルネ・ルノルマン、ジャン・ダギュザン『大いなる死』(1909)では、インドの植民地で働く鉄道建設技師が伝染病への恐怖からペストに感染した同僚を殺害する。アンドレ・ド・ロルド、アンリ・ボーシュ『緩慢な死の館』(1916)では、泥棒の兄妹が入り込んだアメリカ西部の豪華な城館が、誰も生きては出られない癩病の療養所であると判明する。アルフレッド・サヴォワール、レオポルド・マルシャン『死を前にして』(1920)では、狂犬病の蔓延するアフリカ北部で、医師である夫が妻とその愛人を幽閉したうえで、二人のどちらかに狂犬病ウィルスを接種したと宣言する。

伝染病を扱った作品には植民地など辺境の地を舞台にしたものが多いが、それは細菌学の発達や、帝国主義による植民地拡大とそれにとまうさまざまな風土病の発見と分かちがたく結びついているからである。

微生物学の到来は植民地帝国による征服と時期が一致する。およそ20年間でヨーロッパ列強は地球規模で空間を呑み込む。それとともに健康問題が浮上し、それに挑むことができるのは誕生したばかりの微生物学しかないようだった。ヨーロッパから消えた病気(ペスト)、消えんとしている病気(コレラ)から、「ヨーロッ

8 ダルモン、前掲書、684頁。

9 金森修『病魔という悪の物語 チフスのメアリー』ちくまプリマー新書、2006年を参照。

「植民者の」病気（マラリア）あるいは典型的に植民地の病気（黄熱、睡眠病）にいたるまで、いまや科学に対して問いかけている。それらの病気と闘うことが植民地を拡大するための要件のひとつであるため、帝国主義とヒューマンイズムがここで折り合うことになる¹⁰。

例えば近代ヨーロッパではほぼ消滅していた癩病は、19世紀後半に植民地主義の新たな展開とともに再びヨーロッパ人の前に姿を現した。1897年にはベルリンで第一回国際癩会議が開催され、非文明国の病気がもたらす脅威から文明国をいかに守るかという観点から予防策が議論された。またペストはヨーロッパでは1820年のマルセイユでの流行以降ほぼ終息していたが、中国やインドでは19世紀後半になってもたびたび大規模な流行が続いていた。それゆえに病原菌に対する恐怖はしばしば異民族に対する恐怖と重なり合っていた¹¹。『美しき連隊』でも軍医が天然痘の伝染をジプシーのせいにする場面がある。「ジプシーの連中がわれわれに細菌を伝染したにちがいありません」（529）。このような考え方は当時の医学関係者のあいだでは珍しいものではなかった。

一方、狂犬病はヨーロッパでは昔から激しい恐怖の対象となっていた。実際の被害はそれほど大きいものではなかったが、患者が獣のように荒れ狂う様子が恐怖を幾重にも増加させていた。「たしかに狂犬病の死亡率は取るに足りないものである。[...]それでも病気にかった人の相貌は大昔から人々の想像力を刺激してきたのである¹²」。それゆえに1885年のパストゥールによる狂犬病ワクチンの開発は、フランス微生物学の栄誉としてジャーナリズムで華々しく取り上げられ、犬に噛まれた瀕死の少年の救済といった劇的なエピソードとともに広く紹介された¹³。

10 ダルモン、前掲書、433頁。

11 「広義には、健康であっても病人と接触した人間はみな感染の疑いがある者となる。見知らぬ人々の上にも同じ疑惑が漂い、浮浪者や外国人がつまはじきされる」（同、671頁）。

12 同、322頁。

13 パストゥールが最初に治療したのはジョゼフ・メステールというアルザスの少年であり、そのことがこの物語にナショナリスティックな色彩を与えることになる。「狂犬病による死を最初に免れたのはアルザス人の少年であった。パストゥールの行動にはもともとナショナリスト的底意がなかったにもかかわらず、彼がそこから満足感を引き出すことになったのは、おそらくもっともなことであろう」（ダルモン、前掲書、338頁）。この物語にはさらに1940年のドイツによる占領という悲劇的なエピソードが付け加えられる。「ジョゼフ・メステールは悲劇的な最後をとげることになる。パストゥール研究所の守衛になった彼は1940年に自殺する。ドイツ軍のパリ侵攻に耐えて生き残りたくなかったからである」（同、340頁）。

おわりに

グラン＝ギニョル劇は同時代のブルジョワ階級の伝染病に対する漠然とした不安を利用した。狂犬病はその知名度の高さと激しい劇的効果のゆえに恐怖演劇にとっては格好の素材であった。また癲病や赤死病のような容貌の変化をもたらす病気は、グラン＝ギニョル的な身体損壊の主題ゆえに好んで用いられた。興味深いことに、当時の多くの文学作品に登場する梅毒はグラン＝ギニョル劇にはほとんど出てこない¹⁴。梅毒は恐怖演劇の素材とするにはあまりに日常的で身近な存在であったように思われる。恐怖演劇における恐怖の対象は、観客の関心を引きつけるだけの現実性を持ちながら、同時に無害な娯楽としての虚構性を保たなくてはならない。観客はこのような適度な距離を置くことで、悲惨な現実を審美的な観点から安心して眺めることができたのである¹⁵。

最後に参考までに、初期のグラン＝ギニョル座と関連の深かったオクターヴ・ミルボー（1848－1917）の作品を取り上げよう¹⁶。『伝染病』は1898年にアントワヌ座で初演された一幕劇である。ある地方都市の議会で市長が議員たちを前にして報告を行う。ある議員が腐肉を販売したかどで逮捕された。それを聞いた医師は腐肉の安全性を主張し同僚の議員を弁護する。チフスが発生し兵営に被害が出た。それを聞いた議員たちはブルジョワ居住区の安全を確認して胸をなでおろす。そこへブルジョワの一人が伝染病で死亡したとの知らせが入り、議員たちは色めき立つ。市長は故人を称える演説を打ち、医師は病原菌との闘いを宣言する。最後に議員たちは腐肉を販売し伝染病を広めた議員の死刑を全員一致で可決する。

トリセブス医師 衛生だ！ 常設の衛生会議を設立せねばならぬ！

全員 すばらしい！

野党議員 健康委員会を……予防組合を……。

与党議員 医学会議を。

トリセブス医師 パストゥール研究所を。

14 梅毒は演劇の分野ではウジェーヌ・ブリューの『梅毒患者』（1902）という駆梅宣伝的な意図を持ったヒット作を生み、その後も多くの焼き直しが作られた。クロード・ケテル『梅毒の歴史』寺田光徳訳、藤原書店、1996年、225-235頁、275-276頁。梅毒と19世紀文学の関係については寺田光徳『梅毒の文学史』平凡社、1999年を参照。

15 グラン＝ギニョル劇の恐怖の対象に対する距離感に関しては、真野倫平「グラン＝ギニョル劇と三面記事」、『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第18号、2012年を参照。

16 ミルボーは初期のグラン＝ギニョル座に『老夫婦』*Vieux ménage* (1900)、『やましき』*Scrupule* (1902)、『インタビュー』*Interview* (1904) など時に辛辣な社会批判を含む風刺的コメディを提供した。

野党議員 市の周囲に検疫所を。

全員 そうだ、そうだ！

トリセブス医師 投票しよう！ 病原菌を倒せ！ 死を倒せ！ 科学万歳！¹⁷

議員たちは兵士や貧民が被害者であるうちは伝染病の被害に目もくれないが、被害が自分たちブルジョワの身に及ぶと知ったとたんに態度を豹変させる。最初は衛生対策を小馬鹿にしていた議員たちが、最後には必死の形相で病原菌の撲滅に奔走する。本作に利己的で偽善的なブルジョワ階級に対する批判が込められているのは言うまでもないが、ここで注目すべきはむしろ衛生観念そのものに対する批判的視点である。すなわち、一見科学的判断に基づくかに見える伝染病への恐怖が、実際には政治的・社会的理由から人為的に作られていることが示されるのである。無論このような視点の導入は恐怖そのものを相対化してその効果を弱めるがゆえに、グラン＝ギニョル劇のドラマにおいては禁物である。ただしコメディにおいては時に恐怖演劇の素材がパロディ的に扱われて異化効果をもたらすことがある¹⁸。その意味でこの作品は伝染病を喜劇的観点から扱うことで、『美しき連隊』が立脚するブルジョワの衛生観念そのものを風刺している。

付記

本論文は2011年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2 による研究成果の一部である。

17 Octave Mirbeau, *Théâtre*, Paris, Ernest Flammarion, 3 vol., sans date, t. I, p. 284.

18 例えばミルボーの『やましさ』では大邸宅に忍び込んだ泥棒がブルジョワ以上の紳士ぶりを発揮し、『インタビュー』では殺人犯を追うジャーナリストが犯罪者以上の傍迷惑を繰り広げる。ミルボーはこうして社会正義を転倒することでブルジョワ的な良識を相対化してみせる。